

編集後記

▼特集「就学前の子育て」は前号の特集「小学一年生」の続きです。

保母さんたちが親たち、祖父母たちから子育て状況の激変しているさまを深く聞きとって、小児科医佐野氏、歯科医谷田部氏の指摘とつき合わせていく研究ができるかというと思います。

▼広井園長が「園が赤ちゃんを預かるようになって子どもたちの一人一人の育ち、家庭が良く見えるようになった」と語られているところはとても新鮮でした。ふところ深く、地域とそこの子どもたちをうけいれていて、保母にも毎日が楽しい園づくりが発展しています。

▼「何歳ごろはこうなる。こうする」などの子育てマニュアル本が氾濫し、かえって情報過多の中で親の不安が増幅する昨今です。

この特集に登場する保育者たちがその実践をつうじて提起している共通点は、子どもたち同士、親たち同士、子どもたちと親たちをつなげて、お互いが思い合えるような地域共同の子育てへの挑戦でした。

▼関根氏が日本の異常ともいえる超「車過密社会」を具体的な数値をつきつけて解析してみせてくれました。車中毒症の問題、「働かされ料金の公共交通機関発達の問題」、「働かされ中毒」の親達に子どもたちと寝食を共にできる正常な家庭生活保障する問題等を同病者と共にじっくり考えなくてはと思いました。

▼素敵なおかあさん研究者というイメージの川上氏のレポートは遺跡の臨場感のつたわる分かりやすいものです。たくさんの方々がぜひ今年度中の第二、第四土曜日の一般公開日に現地を訪れて、「奥三面考古・民族博物館」をつくって欲しいという世論を高めていきたいと思います。

▼すぐれた家裁調査官の活動をテレビドラマをみて「大変な状況下でよくやるな」としばしば思います。近藤氏の少年法は改悪せず、現行法できちんと対応してゆべきだという提起、少年犯罪の増加の責任はわれわれ大人にあるという結びをみんなで考えあいたいと思いました。

▼算数を覚え込みの機械的操作でやってしまっただけで今日にいたっている私には岡野氏の報告は読みごたえがありました。わたしと同じく既

成概念にしばられていた学生が「実際に実践者の問いに生き生きと反応して学んでいる子どもたちを目の前にしてとても新鮮でした」という感想を、お母さんたちからも「筋道をたてての勉強に感心した」という感想が寄せられています。今後このようなしつかりとした実践報告が誌上に登場するよう努めます。

(本田)

にいがたの教育情報 NO. 59
1999年8月20日発行
編集・発行 にいがた県民教育研究所
発行人 長崎 明
〒951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル
電話・FAX (025) 228-2924
振替口座・00640-0-12332
印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。